

# 大学生を対象とした金融教育の効果

1210399 伊藤 聖也

高知工科大学 経済・マネジメント学群

少子高齢化に伴う年金問題、貯蓄から投資への転換が求められている日本では金融教育に注目が集まっている。しかし、大学生を対象とした金融教育の研究事例は数例しかない。本研究では、大学生に対し金融教育前後でテストを行う実験をした。金融教育の前後の正答数と、学生の属性の関係性を検証した。金融教育の前後で平均して約1問正答数が上昇している。また、金融教育前の点数と金融教育前後の点数の伸びを被説明変数とする順序プロビット回帰分析を行なったところ、金融への関心・知識がない人に対しての金融教育はよりテストの点数を伸ばす。また、金融教育が必要であると答えた人は、金融教育前の点数が低く、金融教育前後の点数の伸びが大きい。これは金融教育が、特に金融への関心・知識がない人あるいは、金融教育が必要だと考えている人に対して金融知識の向上を促す効果があったと言える。

キーワード：金融教育 金融への関心 金融知識 質問票によるアプローチ

## 1. はじめに

かつて高度経済成長期を迎えた日本では、高い金利のおかげでただ預けているだけでお金が増える時代であった。しかし、その後バブル経済が崩壊し大手金融機関も破綻し戦後初のマイナス成長を余儀なくされ、日本銀行はゼロ金利政策を実施した。そして低金利時代が始まり、ただ預けるだけではお金が増えない時代となった。また、近年日本では、急速に少子高齢化が進み年金だけに頼るのは難しくなっている。それに伴い貯蓄から資産運用の手段としての投資へと転換する動きがある。現在、日本の家計資産のうち株式投資信託の割合（間接的に投資にまわる年金や保険を含む）は18.6%であり、対してアメリカは46.2%にも上る。日本では圧倒的に投資の普及が遅れている。そこで、現在、日本では消費者の金融リテラシーを高めることが不可欠になっている。そして、金融リテラシーを高めるために金融教育をする重要性が高まっている。

Lührmann, Serra-Garcia and Winter (2015) は、金融教育の特徴として、若年期の教育投資は最も効率よく、また一生を通じて使えること、学校教育へ取り込むことは容易であることを挙げている。実際のところ大学生は、アルバイトを始める人が多く使えるお金が増える傾向にある。また、今後社会人になるにあたって大学生の時期に金融教育を行うことは重要である。

大学生を対象とした金融教育の効果を実証的に検証して

いるものは浅井 (2017) があり、金融への関心が低い大学生ほど金融知識の水準が向上すること、すでに金融関係の科目を履修したことがある者にとっては金融教育による知識の増加は小さいことを結論としていた。実験の基本的な枠組みは先行研究に倣う。先行研究と異なる点は、問題の正答数に比例して謝金が増加する金銭的インセンティブを与えている点である。より被験者の問題へ取り組む意識が高くなると考えられる。

## 2. 研究方法

### 2.1 概要

高知工科大学（経済マネジメント学群・システム工学群・環境理工学群・情報学群）28名、高知県立大学（文化学部）10名、高知大学（人文社会科学部・地域協働学部・理工学部・医学部）8名の計46名を対象にZoomを用いて実験した。まず、事前アンケートを前日に回答してもらい、個人の金融への関心と知識を測った（詳細は2.2）。当日金融に関する動画を視聴してもらい、その前後にテストを行った（動画の詳細は2.3 テストの詳細は2.4）。その後動画に関するアンケートを行った。

事前アンケートの回答を順序プロビット回帰分析の説明変数とし、テストに正解した数を被説明変数とする。

### 2.2 説明変数

事前アンケートでは、被験者の金融への関心・知識に関する31の質問を行った。大きく分けて、性別や学部学群など

の「個人の属性に関するもの」、金融教育は必要だと思うかななどの「金融への関心」、金融関係科目を履修したなどの「金融の知識」である。これらを説明変数とする。

#### 個人の属性に関する変数

女性だと回答すれば1、男性ならば0をとる変数とした。大学生は、出産や労働の経験をしていない可能性が高いため、それらの影響を受けることがない。よって、男女で金融知識に差異はない可能性がある。また、学部・学群は、経済・マネジメント学群ならば1、それ以外ならば0をとる変数とした。

#### 金融への関心に関する変数

「金融教育は必要だと思うか」という質問に対し、はいと答えた人は1、それ以外は0を取る変数とした。金融業を第一志望としている学生は1を取る変数とした。これは、金融業へ志望する人ほど金融知識が高いものだと予想するからである。先行研究では有意な結果は得られていなかった。また、結婚した際、自分で家計管理をしたい人は1を取る変数とした。家計管理への関心が低い人は、もともと関心がないため、金融教育をすることが有意である可能性があるからだ。先行研究では、有意な結果は得られなかった。「あなたは今お金に関して気を付けていることはありますか」と質問し、あると答えた人は1を取る変数とした。気にしていることがあるひとは金融への関心が高いと予想される。先行研究では、有意な結果が得られていた。

#### 金融の知識に関する変数

金融関係科目を履修したことがある人は1、履修したことがない人は0をとる変数とした。先行研究では、金融関係科目を履修した人は、金融教育の効果が少なかったことが見られた。Peng, Bartholomae, Fox and Cravener (2007) は、大学時代の専攻に焦点を当てて分析を行っている。経済マネジメント学群生や金融関係科目を履修している人は、金融知識の増加は大きくないことが予想される。「家計の世帯所得を知っていますか」と質問をし、知っているとした人は1、知らないと答えた人は0を取る変数とした。

## 2.4 被説明変数

Lusardi and Mitchell (2014) は、金融知識の水準は「割引現在価値」、「分散投資」、「複利」、「インフレーション」の4つの項目の理解が、指標としてあらわすことができるとしている。先行研究に倣い以下4問の金融教育前の正答数と

金融教育前後の正答数の伸びを被説明変数とする。

#### 割引現在価値

・問題 「1年後に確実に1万円がもらえる債券があります。年利は2%です。その債券の現在の価値はいくらですか。(小数第1位を四捨五入)」

・回答 自由記述

#### 分散投資

・問題 「1社の株を買うことは、通常、株式投資信託を買うよりも安全な投資である。」

・回答 「1,正しい 2,間違っている 3,分からない」

#### 複利

・問題 「100万円を預貯金口座に複利で預け入れました。金利は毎年2%とします。5年後いくらになっているでしょう。」

・回答 「1,110万円より多い 2,110万円より少ない 3,110万円ちょうど 4,わからない」

#### インフレーション

・問題 「年間インフレ率が3%で、普通預金口座であったが受け取る年間利息が1%なら1年後にこの口座のお金を使ってどれくらいの物を購入することができるか。」

・回答 「1,今日より多くの物が買える 2,今日より少ないものしか買えない 3,今日と全く同じものが買える 4,分からない」

12回に分けて実験を行ったため、回答が出回ることを鑑みて類題をそれぞれ一問作成しそれぞれを組み合わせることで防止した。

## 2.3 金融教育の動画

割引現在価値は、言葉の意味と例題として「金利5%の環境下で1年後の100円は現在のいくら価値か」を解説した。分散投資は言葉の意味と投資信託とその他の金融商品のリスクリターンを解説した。複利は、100万円を10年間単利と複利で運用した時どのくらい差ができるかを図示解説した。インフレーションはラーメンの値段が約50年間で12倍にもなっていることを解説した。

これらの動画は各2分程度、合計6分程度の事前に作成した動画で行った。異なる時間帯に行っているが同じ動画であるため内容の違いが結果に影響を与えることはない。

### 3. 結果

#### 3.1 記述統計

変数に関する記述統計を表 1 にまとめた。被説明変数である金融知識の向上は平均で 1.196 である。これは、金融教育前後でテストの点数が約 1 点上昇したということである。性別は 0.522 であるがこれは、女性と回答した人が 52% であることを示している。他の変数については、学部・学群は経済・マネジメント学群の学生が約 30% であること、金融教育は必要だと答えた人は約 70%、世帯所得を知っていると答えた人は約 40%、金融に関心があると答えた人は約 60% である。

#### 3.2 金融教育は効果があったのか

被験者 46 人中 31 人は点数が上昇し、15 人は点数の伸びは見られなかった。ここで本研究の金融教育が被験者の金融知識の伸びに影響しているのかを確かめてみよう。被験者自身の点数が伸びるか否かはランダムであるという帰無仮説を立てる。この時、平均値 23 を取る二項分布のグラフが描ける。このグラフから 31 人以上点数が伸びたという範囲の P 値を調べると 0.005 であった。P 値が有意水準より小さいので、帰無仮説を棄却できる。よって、本実験の金融教育は被験者の金融知識の伸びに影響を与えたと言える。

#### 3.3 誰に効果があったのか

金融教育前のテストの点数を被説明変数とする順序プロビット回帰分析の結果を表 2 に、金融教育前後の点数の変化を被説明変数とする順序プロビット回帰分析を表 3 にまとめた。

金融への関心がある・金融業を第一志望にしている・世帯所得を知っていると答えた人は、金融教育前のテストの点数は有意に高い。また、金融教育前後の点数の伸びは、有意に低い。(金融業を第一志望は金融教育前後の変化では有意水準ではなかった)。つまり、金融への関心がある人に比べて関心がない人のほうが金融教育による点数の上昇があると言える。また、世帯所得を知っている人は両親と普段から金融に関する会話をするので金融の知識もあるのではないかと考えられる。

金融教育は必要であると答えた人は金融教育前の点数が低かった。また、金融教育前後の伸びは有意に高かった。これは、金融に対して知識がないため学ぶ必要があると感じ

ている人が多いと考えられる。

### 4. 今後の課題

課題は 2 点ある。

1 点目は、データ数だ。本研究では 46 人の被験者で有意な結果が出たものがあつた。今後被験者数を増やすことで、結果が一般性を持ち、今回有意な結果が出なかった説明変数も有意な結果が出る可能性がある。

2 点目は、金融教育前後のテスト両方で満点を取った被験者の伸びを測ることができなかったことだ。より高度で難易度が高い金融教育を施すことが解決法だ。

#### 謝辞

本研究を進めるに当たり、指導教官の肥前教授からは多大な助言を賜りました。厚く感謝申し上げます。

#### 参考文献

- [1] 浅井義裕 (2017) 「金融教育は有効なのか？日本の大学生を対象とした考察」生活経済学研究
- [2] 上村協子・村上恵子 (2016) 「大学生における金融教育」生活経済学研究
- [3] 資金循環の日米欧比較 (2020 年 8 月 21 日) 日本銀行調査統計局
- [4] Peng, Bartholomae, Fox and Cravener (2007) ) The Impact of Personal Finance Education Delivered in High School and College Courses
- [5] Lüthmann, Serra-Garcia and Winter (2015) Teaching teenagers in finance: Does it work?

表1 変数に関する記述統計

被説明変数	サンプル数	平均	中央値	最大値	最小値
金融知識の向上	46	1.196	1.00	4.00	0.00
説明変数					
性別	46	0.522	1.00	1.00	0.00
学部・学群	46	0.326	0.00	1.00	0.00
金融教育は必要だと思うか	46	0.717	1.00	1.00	0.00
金融関係科目を履修	46	0.348	0.00	1.00	0.00
世帯所得を知っている	46	0.413	0.00	1.00	0.00
金融業への就職希望	46	0.087	0.00	1.00	0.00
配偶者への依存希望	46	0.783	1.00	1.00	0.00
金融への関心	46	0.630	1.00	1.00	0.00

表2 金融教育前の点数を被説明変数とする順序プロビット回帰分析の結果

金融教育前の金融知識	係数	標準偏差	p 値
説明変数			
金融への関心	0.626 *	0.365	<b>0.086</b>
配偶者への依存	0.504	0.455	0.267
金融業を第一志望	1.690 **	0.709	<b>0.017</b>
金融関係科目を履修	-0.624	0.562	0.267
世帯所得を知っている	0.848 **	0.367	<b>0.021</b>
金融教育は必要である	-1.107 ***	0.422	<b>0.009</b>
性別（女性ダミー）	-0.469	0.360	0.192
学部・学群	0.711	0.508	0.162
Log likelihood	-55.507		
観測数	46		

\*p&lt;.10 \*\*p&lt;.05 \*\*\*p&lt;.01

表3 金融教育前後の点数の変化を被説明変数とした順序プロビット回帰分析の結果

金融教育前後の変化	係数	標準偏差	p 値
説明変数			
金融への関心	-0.661 *	0.362	<b>0.068</b>
配偶者への依存	0.156	0.454	0.731
金融業を第一志望	-1.147	0.722	0.112
金融関係科目を履修	-0.037	0.554	0.947
世帯所得を知っている	-0.755 **	0.369	<b>0.041</b>
金融教育は必要である	0.945 **	0.437	<b>0.031</b>
性別（女性ダミー）	0.241	0.367	0.51
学部・学群	-0.510	0.498	0.306
Log likelihood	-55.775		
観測数	46		

\*p&lt;.10 \*\*p&lt;.05 \*\*\*p&lt;.01

